

刀 兼常 (政常 初代)

尾張 慶長

「兼常」「政常」「相模守政常」

「相模守藤原政常」「相模守政常入道」

「相模守藤原政常入道」

納戸太郎助 奈郎太郎

納戸助右衛門兼常の次男で天文四年

(一五三五) 肉の納戸で生まれる。

永祿十年(一五六七) 尾張春日郡 小牧村に

分家をして「兼常」と銘を切る。

天正二十年(一五九二) 五月十一日 肉白秀次を取次で

相模守と受領し「政常」と銘を改める。

慶長五年(一六〇〇) 清州城主となった松平忠吉に

抱えられ後に名古屋城下に移住。

元和五年(一六一九) 二月十八日 八十四歳で没する。

平成二十二年十月十六日 鑑定刀

刃長 74.2cm (二尺四寸四分八厘) 反り 1.53cm (五分)

切先長 4.12cm 茎長 19.0cm (19.2cm) 茎先 無し

元中 3.09cm (2.98cm) 先中 2.11cm (2.01cm)

元重 0.65cm (0.55cm) 先重 0.68cm (0.41cm)

元重 0.70cm (0.66cm) 茎先重 0.39cm (0.38cm)

錫造、庵棟尋常、錫高は尋常で平肉、刃肉がふくらみつき、重ねは薄目で身中の広めの造り込みとなる。先中も広く

切先は中切先が延びてフラフラは枯れ、反りは中肉反りが浅め、長寸で力強く、かにも大物斬を感じさせる。天正の刀姿となる。

地鉄は小板目に板目交じりて肌立ち細かな地沸が厚く一面につき肌を添って地景が鮮明に表われた鍛えの良、見事な

鉄で地色は黒味を帯びて明るく冴える。

刃文は直刃で浅く汚れ物打から横手に向かって焼中を高める。刃縁に喰違、ややぼろれが表われ金筋、砂流しが交じり

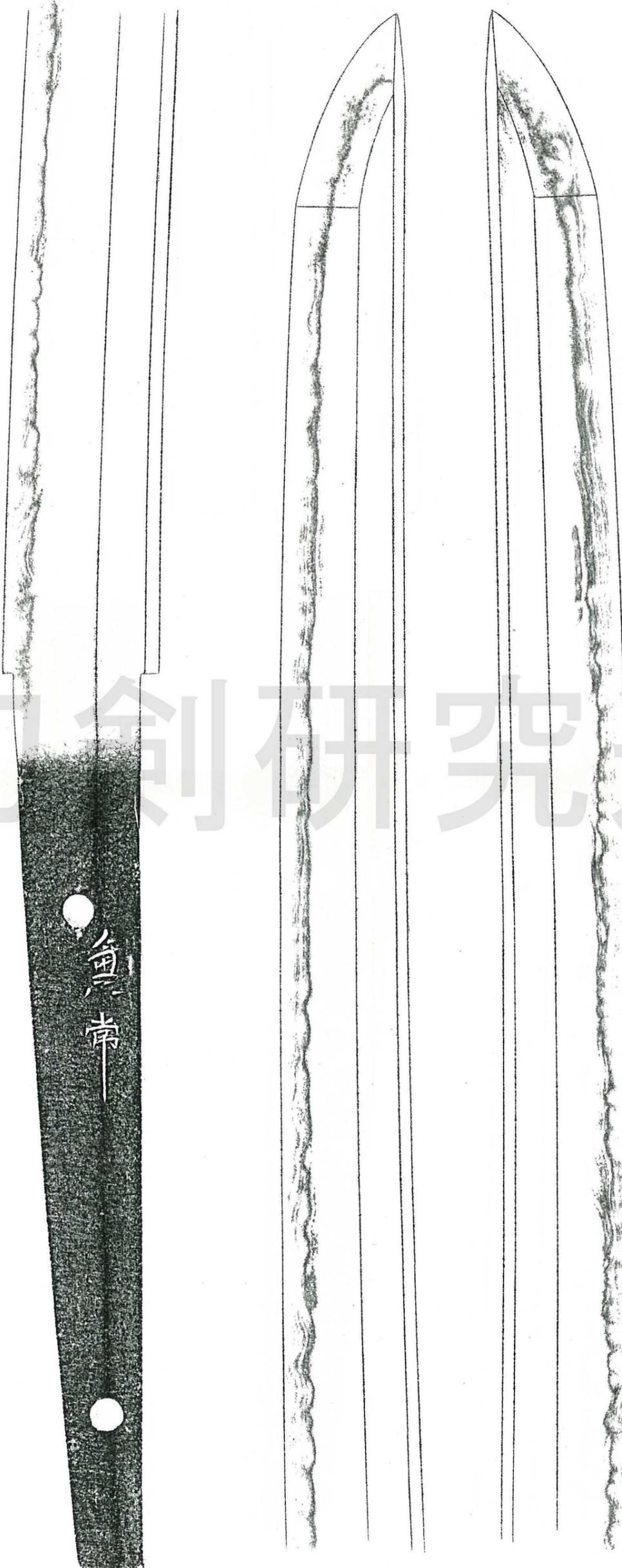
刃中は小正と葉が入る、匂口は締ってやや次升かげん、所々光の強、沸が交じる。特に物打から先は、やや大粒の沸が豊かに

つく。帽子 表は直刃で浅く汚れ先は一文字返り、裏は浅く汚れて先は煖話め、こころで本刃以上に

差は 生ぶ、錫中はやや広く錫筋は丸くはつきりと立たず、刃方は張らずに先を細め、茎尻はやや丸味と

棟角 (棟区からこころ程は角を磨る) 「」 鏡目は勝手下り、目釘穴は二個、

銘は錫筋にかぶせて独特の角張った文字で二字銘を切る。



刀剣研究連

刀 会藩臣 和泉守兼定 (十一代)

慶応二年八月日 (一八六六)

岩代 文久

「陸奥国会津任兼元」「岩代国若松任和泉

守兼定」「於新発田和泉守兼定謹作」

「於加茂和泉守兼定」「福島県北会津郡

若松任兼定」 天保八年(一八三七)十二月三日

十代古川近江兼定の子として生れる 幼名友弥

初銘「兼元」。文久三年(一八六三)十二月四日

「和泉守」を受領「兼定」と改銘、名も清左衛

内に改める。慶応元年(一八六五)会津(帰国、

明治三十六年(一九〇三)三月二十八日没 六十七歳。

平成二十八年四月十五日

刃長 69.4cm (二尺二寸九分)

元重 0.78cm (0.65cm)

茎元中 2.75cm

鑑定刀  
反り 1.56cm (五分二厘)  
先重 0.60cm (0.50cm)  
切先長 4.64cm  
茎元重 0.77cm (0.67cm)  
茎先重 0.39cm (0.31cm)

鑄造、庵棟尋常、鑄中は狭めて鑄は高く、重ねと身中の尋常な造込となり、元中先中の差は少く、切先は

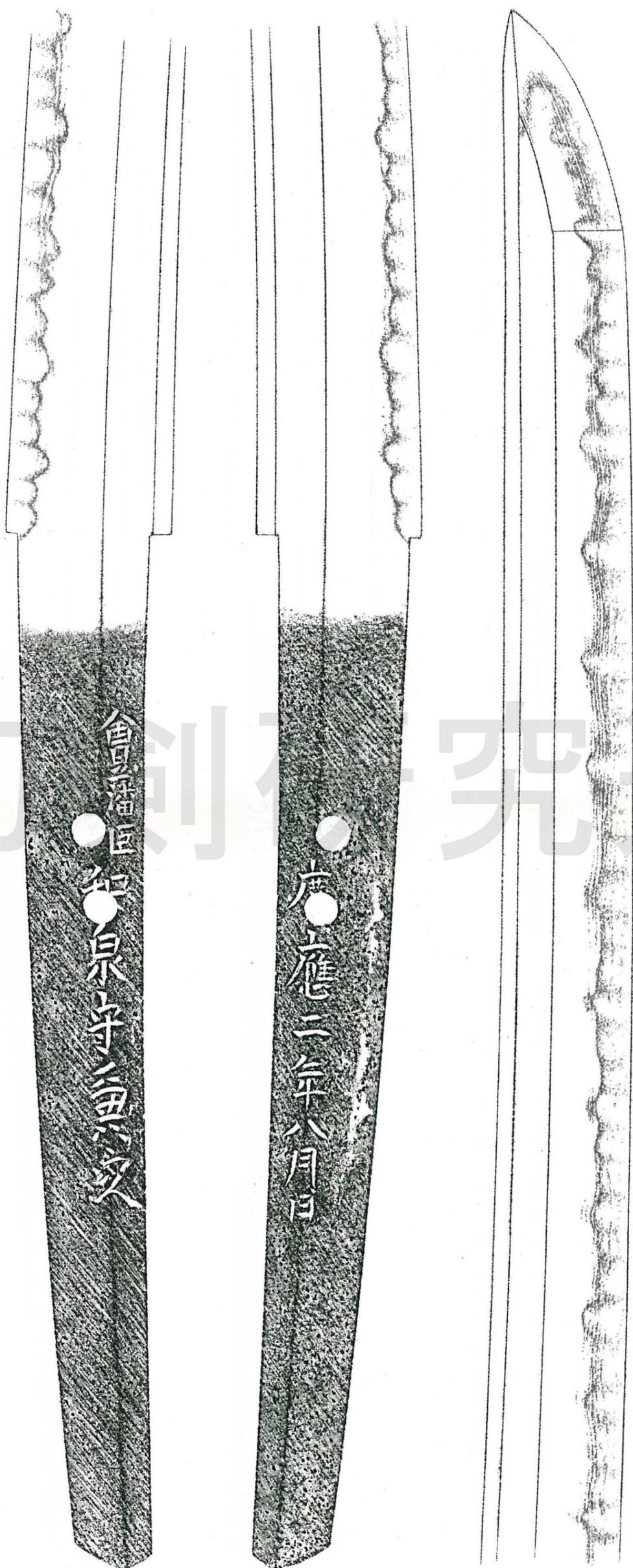
大切先に近くフクラは傾合、反りは中向反りが尋常でやや先反りを加える。

此鉄は狂目でよく約升、細かな地景が表われる。

尖りかげんになる。刃中は足が長く入り刃先に抜け、金筋・砂流しを交じえ、匂口は明る。

帽子は乱れ込んで先は丸く、掃けて返る。

刃角  $\square$  棟小丸  $\square$  鑄は大筋違、目釘穴は二、上の穴は鑄筋にかり、下の穴は鑄筋にかぶせて



會藩臣 和泉守兼定

慶應二年八月日

刀 三品源直吉

文政二年二月日 (一八一九)

文政 尾張

「眼龍心直吉」「泉心子直吉」「三阿孝母  
士山口徹弥太源直義」「松前福少剣工  
泉心子源直義造之」

山口徹弥太。三品丹後守兼道六代目  
直道の子という。生国尾張、兵部寿  
実、大慶直胤内人。

初銘「直吉」。

嘉永年間、松前藩に招かれ、北海道  
で鍛刀をす。北海道日高国浦河で  
没 七十四歳。

平成二十八年四月十五日 鑑定刃

刃長 68.3cm (二尺二寸五分四厘)

元重 0.73cm (0.71cm)

茎元中 2.66cm (2.58cm)

錫造、磨棟高め、錫高、錫巾は尋常、重ねは  
中間反りが頃合、な、尋常な刀姿となる。

わずかに小互の目を交じえて鼠足が入る。匂口は締って沈む。

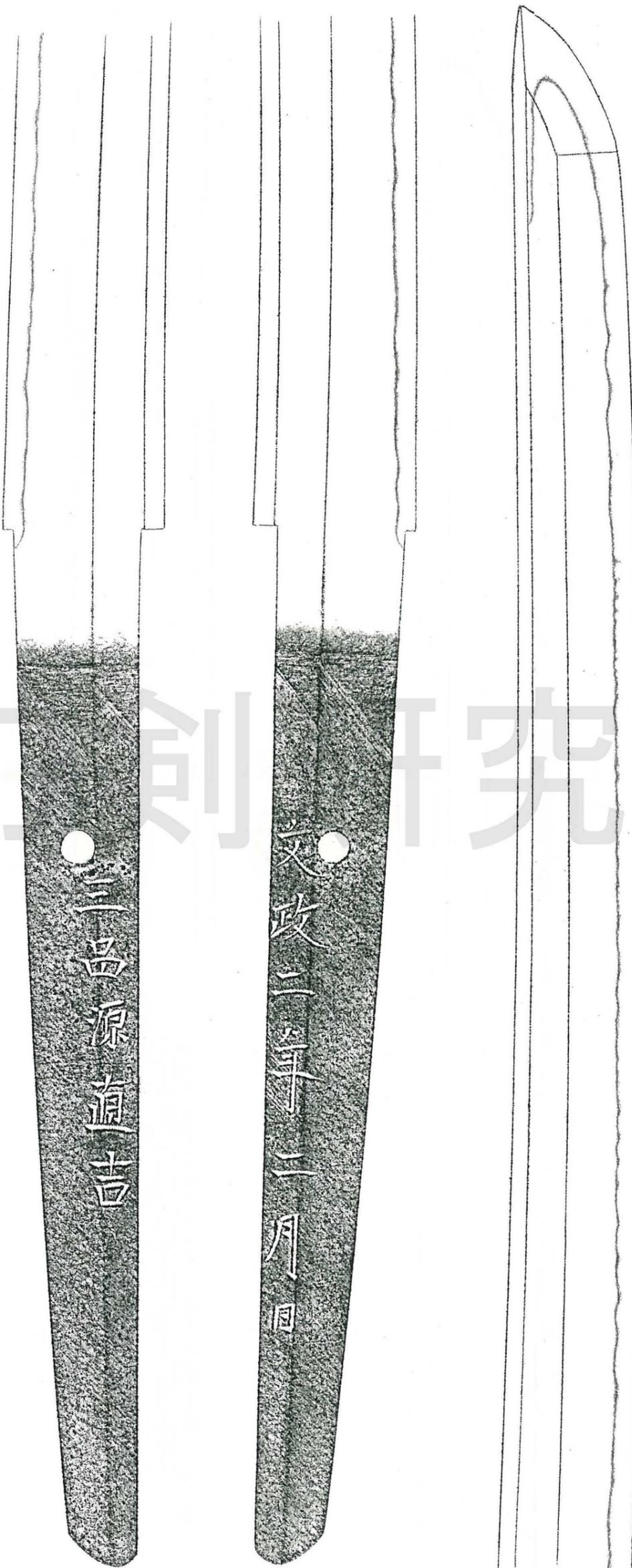
茎は生ぶ、錫高、錫巾、重ねは尋常、長寸で先中を頃合、狭め、先は刃上り乗尻、刃角、棟小丸、棟によせて錫地に、裏は製作年紀を錫地に切る。

地鉄は小板目がよく約んで綺麗に所謂鏡鉄。刃文は直刃、

反り 1.38cm (四分六厘) 元中 3.04cm (2.89cm) 先中 1.93cm (1.83cm)

先重 0.48cm (0.49cm) 切先長 3.07cm 茎長 21.0cm (21.3cm) 茎反り わずか

茎先中 1.46cm (1.44cm) 茎元重 0.74cm (0.71cm) 茎先重 0.33cm (0.32cm)



三品源直吉

文政二年二月日

脇指 兼常

慶長

「兼常」「政常」「相模守政常」

「相模守藤原政常」「相模守政常入道」

「相模守藤原政常入道」

納戸太郎助 奈郎太郎

納戸助右衛門 兼常の次男で天文四年

(一五三五)肉の納戸で生まれる。

永祿十年(一五六七)尾張春日郡 小牧村に

分家をして「兼常」と銘を切る。

天正二十年(一五九二)五月十一日 南白秀次を取次で

相模守と受領し「政常」と銘を改める。

慶長五年(一六〇〇)清州城主となった松平忠吉に

抱えられ後に名古屋城下に移住。

元和五年(一六二九)二月十八日八十四歳で没する。

平成二十八年四月十五日

鑑定刀

刃長 42.3cm (一尺三寸九分六厘)

元重 0.69cm (0.62cm)

茎元中 2.7cm

鑑造、庵棟尋常、鑄中は狭めて鑄高は尋常、重ねは尋常で身中の広い造込みとなり、切先は中切先でフクラは尋常、

反りは中向反りに先反りを加え手元に踏張りのついた、刃長は短かく茎も短かい、新古境の脇差姿。

地鉄は小枚目に小歪、板目が流れた肌が交じり、細かに肌立ちながら地沸は大粒の沸と細かな沸が厚く豊かにつき、

肌にかけて地景が底に沈む。

刃文は刃区より中程までは頭の丸い互の目を直刃に仕立て、その先は横手

まで、湾れかけんに焼巾を広め、大粒の沸を深くつけ地に沸が二ぼれる。刃縁は肌にかうんで喰違をせせ、長く細く

金筋を交じえ、刃中は足・葉よく入る。沸・匂は深めて明るい。

沸が深く短かく返る。

刃二角、棟角、鑄は切り、目釘穴は大きく、銘は鑄筋にかけながら

反り 0.70cm (三分)

先重 0.53cm (0.46cm)

茎先中 1.38cm

切先長 3.38cm

茎元重 0.71cm (0.65cm)

元中 3.04cm (2.91cm)

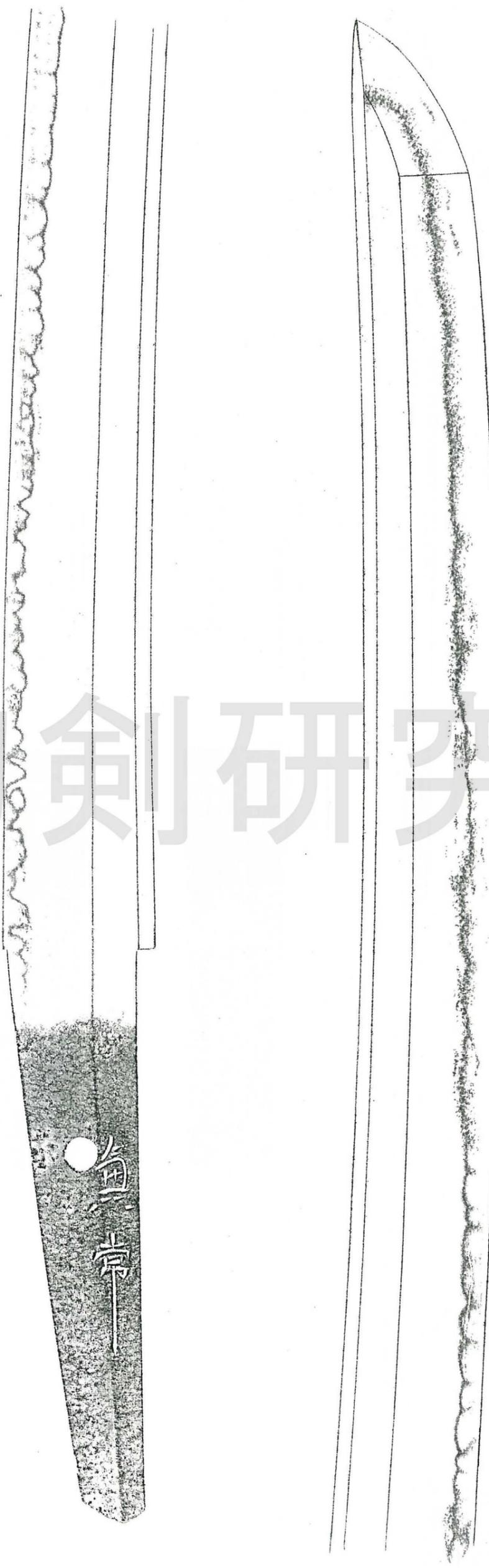
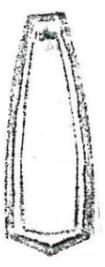
茎長 12.2cm (12.5cm)

茎先重 0.41cm (0.38cm)

先中 2.30cm (2.18cm)

茎反り 無し

帽子 表は乱れて先は掃けて返り、裏は



刀剣研究連合会

短刀 備前国住長船永光作

天文三年八月吉日(一五三四)

備前 大永

「備前国住長船永光」「備前住長船永光」

「備前国長船住五郎次郎永光美作国」

鷹取庄於黒坂村作之

「備前国長船次郎兵衛尉永光」

天文前後の永光には五郎次郎と

次郎左兵衛の俗名を切つた作があり、

五郎次郎は永正を初代、天文を二代

という。

次郎左兵衛には大永・天文の年紀を

する。

平成二十六年四月十五日 鑑定刀

刃長 29.7cm(九寸八分)

茎反り 無し

反り わずか

元中 2.87cm(2.70cm)

元重 0.75cm

茎長 10.7cm(10.7cm)

平造、庵棟高く、重ねは厚めで身中の広、造込斗となり、フクラはやや枯れ、長寸でわずかに反りのついた、長寸で頑丈な短刀姿となる。

地鉄は板目に圭目、裏は流れた証目を交じえてやや肌立ち、細かな地景が沈み、映りは棒映りに近く

淡く表われる。

刃文は直刃、浅く湾れて小互の目を交じえ、流れた肌からんで刃縁に打のけ、金筋・砂流しが表わ

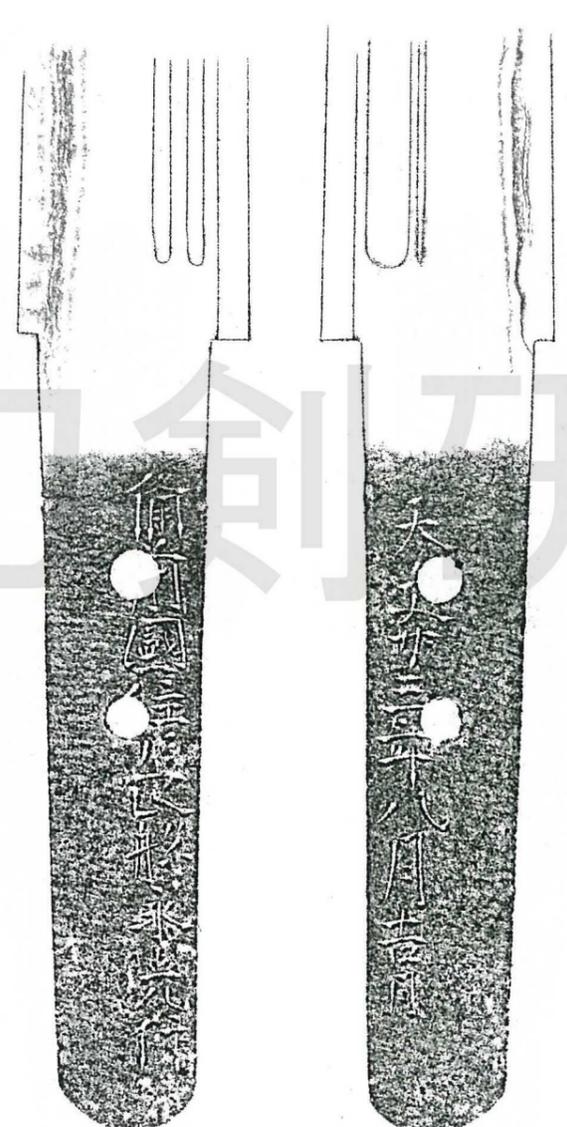
れ表のフクラの下辺りは二重刃になる。刃中小足が入り手元は小沸がよくつき金筋・砂流しを交じえ、その上は締りかげん。

帽子は乱れて催焼を交じえ、先は大丸が角張り返りは尋常。

彫刻 表は丸止めの二筋樋、裏は丸止めの刀樋に連樋。

茎は生ぶ、重ねは厚く身中は広く、元巾と先中の差は少なく、刃上り栗尻、刃角口、棟角、棟に寄せて表裏に切る。

鑢は勝手下り、目釘元は二、銘は



刀剣研究連

刀表 享和三年二月日 (一八〇三)

熊府士為貴田紀正雄

肥後住正次

肥後

「九州肥後国同田貫正次」「肥後国住同田貫

藤原正次」於東大城下造同田貫正次」

菊川仙左衛門、または仙右衛門(別人か)。

上野介正国九代という。

水心子正秀内人。のちに江戸に住す、

天保四年(一八三三)没。

文化ころ肥後に「東肥正次」と銘を切り、

薩州正良内人と伝える刀工がいる(同人か)。

平成二十八年四月十五日

参考として

刃長 70.8cm (二尺三寸三分六厘)

元重 0.68cm (0.61cm)

茎重 0.49cm (0.41cm)

茎先重 0.38cm (0.33cm)

反り 2.40cm (七分九厘)

元中 3.51cm (3.36cm)

先中 2.35cm (2.28cm)

切先長 4.35cm

茎長 20.2cm (20.5cm)

茎反り 0.20cm

茎先重 0.72cm (0.64cm)

茎重 0.27cm

鑑は化粧鑑、磨出しは切て下は大筋達、目釘穴はやや下方に

一、銘は太刀銘に大きく切る。

茎尻は入山形、刃角尚口、棟角小丸

帽子は乱れて先は丸く返る。

刃文は互の目、焼頭が尖る気味があり、乱れの谷に沸づき、刃中足、葉よく入り、匂口は大粒の沸が厚くつき

地鉄は小板目がよく約んで所々歪目を交えてよく約み、細かな地沸が厚くつき。

鑑は化粧鑑、磨出しは切て下は大筋達、目釘穴はやや下方に

